

巻頭言

## 文化財建造物と災・害

理事長 高橋 康夫

「気候危機」の到来なのでしょうか。今年もまた各地に大雨特別警報が発令され、激甚災害があいついで発生しています。

文化財建造物の保存・継承の視点からすると、鬼神の「しわざ」ともいわれる「災（わざわい）」はもとより、虫、カビなどの菌類、藻類、コケ類などによる「害」もまた、文化財建造物をそこない、悪い結果をもたらすものにほかならないでしょう。

なんとかして災・害を防ぎたいというのは、人の自然な「しわざ」ですので、古くからさまざまな対処がなされてきたことはいまでもありません。とくに20世紀後半になると、大災害が頻発したこともあって、震災・火災・水害・風害・雪害・津波・高潮などの自然災害への多面的かつ総合的な対策が求められました。こうして地域に対しては都市防災、文化財建造物に対しては防犯も含めた総合防災といった統合的な防災の考えかたが出てきたようです。昨年の本誌（34号）には、防災の最新状況に関する大窪健之氏の論稿「文化遺産防災から歴史都市防災へ」を掲載しています。

建造物を自然災害から守る〈防災〉とともに、動植物や微生物などによる「害」から守ること、さらに定期的な修理によって自然な経年劣化に対処することも、古くから行われてきました。一例を挙げますと、腐朽菌による柱の根腐れを補修するために発達したのが根継ぎの技術です。それは堅固でありながら、芸術的といえるほど巧妙になりました。こうした努力を地道に積み重ねることによって建造物の価値を長い歳月をこえて伝えようとしてきたのです。

ところで、近年、文化財建造物の修理などの状況を眺めていて素人ながら気になるのは、文化財建造物の劣化が、経年劣化の常識範囲をこえて激しくなっているのではないかということです。彩色・塗装修理後わずか数年でカビの大被害にあうとか、新材の太い柱が数十年で根元が腐るなど、短期間に大きな被害が出てきているように思います。カビ害は修理によって取り戻された美観をそこないますし、柱の腐朽は、耐震診断の前提である構造体の健全性を害するので、安全が担保されなくなります。いずれも保存修理の根底を揺るがすものでしょう。

急激な劣化・害は、気候・風土、豪雨・台風、高温多湿、結露、敷地環境、使用状況な

ど、いくつもの要因が複合して生じているのでしょう。保存修理の現場それぞれにおいてその原因をさぐるとともに、これまで以上にシロアリ・腐朽菌・カビ・藻類などによる劣化・害（腐れ・変色・汚染）を防ぐこと、すなわち〈防劣〉・〈防害〉に配慮する必要が生じているようです。

文化財建造物には、歳月を重ねることによって得られた独特の情趣があります。〈防劣〉・〈防害〉技術の開発は、文化財建造物を歴年の情趣とともに未来に引き継ぐための大きな課題になってきたように思います。現状を省みてあえて付け加えるなら、総合防災と同じように、多面的で総合的な劣化や害の防止対策、統合的な〈総合防劣〉・〈総合防害〉が求められているのではないのでしょうか。

最後に余談ですが、カビ・藻類は、姫路城（国宝・世界遺産）などのような白漆喰塗りの建造物にも害をもたらしています。さらに亜熱帯や熱帯の石造建造物、たとえば世界遺産である沖縄県の玉御殿（国宝）、カンボジアのアンコール遺跡の建造物などには、とくに顕著な変色・汚染が生じています。本来あるべき美しい姿を失い、価値が大きくそこなわれていると言わなければならない状態です。個人的には、玉御殿が琉球石灰岩と漆喰の真っ白な「王宮」・「神殿」に復旧され、そしてふたたびよみがえった色彩豊かな首里城正殿と並びたつ姿を見たいと思っています。